

CASE 7 エプソン販売から 呼び出しがかかった

大友純教授のもと、広告について研究・活動しているグループに、プリンタなど情報関連機器を取り扱うエプソン販売株式会社（以下略エプソン）からプロジェクトの依頼がありました。
当時2年生だった学生たちは半年後、学内で幹部の方々に前に研究成果のプレゼンテーションをしたのです。



緊張のプレゼンテーション

森下加奈代／趙恩周（商学部 3年）
Kanayo Morishita / Eunjoo Jo

幹部の前で プレゼンテーション

「人材マーケティング」環境ビジネス「口コミ」の3つについて調査・分析を行い、その研究結果を報告・提案してほしいというのが、エプソンからのオーダーでした。早速このグループでは、テーマ毎に10人程度のメンバーを決め、それぞれが半年間という期間の中で活動することになりました。

人材マーケティング班は、好感をもてない人の定義から、逆に好感をもたれる人物像について考えました。そこから人の特性を見抜き、それぞれがどのような仕事に適しているかの研究を進めました。

環境ビジネス班では、エコに貢献する新しい商品として『エコスクリュウ』を提案。これは紙を切断しないシュレッダーで、エコロジーと機密保持を両立する優れたものです。

また、口コミ班では大学生を対象にアンケートを行い、口コミにどの程度の影響力があるかを調査しました。

それぞれの活動を通して、各チームの人数が多かったことなどから、「なかなか日程が決まらない」、「話がまとまらない」といった問題が起こりました。

こうしてまとめた調査・分析の結果は半年後、大学にエプソンの部長級の方5（6名）を招き、各15分間の持ち時間の

社会で働くことの自覚

このプロジェクトを通して学生は、研究活動の進め方だけではなく、チームワークや会議のやり方を学びました。班におけるそれぞれの役割や人間関係では苦勞したようですが、活動を通してさらに仲が深まりました。

また、このプロジェクトには、社会と接することで勉学のモチベーションを高める目的もありましたが、しっかりと達成できたようです。

「現場で実際に働いている方にプレゼンテーションを見ていただき、意見をもらえたのは貴重な体験でした。これから社会に出て働く、という自覚も芽生えました」（参加した学生）



プロジェクトについての取材中の風景



明大祭では一致団結して取り組みました



明大祭に出店した様子

真に価値ある 情報とは

「文書やインターネットサイトから得られる情報は少ない」、「現地に行ってみて初めてわかることがある」という考えで指導を行っている中川秀一教授のもと、フィールドワーク（現地での観察や調査）による情報収集を徹底している学生のグループがあります。

今回のテーマ『奥美濃カレーの 프로모ーション活動』に着手するにあたって、学生たちは実際に現地に行き、郡上市観光連盟の加盟店の方々に聞き取り調査を行いました。聞き取り調査では、郡上市が抱える問題やアピールポイントについて伺いました。「実際にお店を回ってみると、お店によって観光開発へのモチベーションに差があることに気づきました」、「現地を歩いてみると、観光資源になりそうなものが、カレー以外にもたくさんありました」（参加した学生）

このように、現地の生活感やリアリティを直に感じることが、正しい理解へとつながります。自分が発見した情報こそが、真に価値ある情報なのです。

CASE 6 真の情報は『奥美濃カレー』 発祥の地にあった！

学生がデザインした
イメージキャラクター



町おこしの起爆剤として、岐阜県郡上市で開発された『奥美濃カレー』。
そのプロモーション活動を行うにあたって、まず現地での聞き取り調査、『奥美濃カレー』の東京での認知度測定など、学生たちが実際に動いて情報の収集・分析を行いました。

山本悠貴（商学部 3年）
Yuki Yamamoto

地方には良いものが 隠れている

『奥美濃カレー』の材料は、郡上市が誇る豊かな自然の中で育った米や野菜、肉、魚、隠し味として、郡上伝統の「郡上味噌」を使っています。

調査から得た情報と『奥美濃カレー』の特徴をもとに、学生たちはプロモーション活動の「環」としてイメージキャラクターを考案しました。商品に親しみやすさを持たせ、認知度を向上させるのが狙いでした。

そして、明大祭（明治大学の学園祭）で『奥美濃カレー』を販売。その場でお客さんからアンケートをとりました。これによって、東京の人が感じる『奥美濃カレー』の味、認知度などがわかりました。同時に、学生たちはただカレーの味を伝えるのではなく、フィールドワークで得た知識を活かして、自分たちが実際に現地で感じた郡上市の魅力を伝えようと奮闘しました。

「せっかく良いものがあるのに、それが地方にあるため埋もれてしまうのは残念です。良いものは良いと発信していくべきだと思います。私は社会人になっても、自分から働きかけて得た情報を大切にしながら行動していきたいです。生きた情報は現場にしかない！」（参加した学生）